中岡成文著『ハーバーマス』

—ハーバーマスとデリダをめぐって—

高橋　透

目下刊行中の叢書『現代思想の冒険家たち』は，取り上げられた思想家の思想についての明快なプロフィールと簡明な解説を提供するにとどまらず，さらに，その思想の抱える問題点やその思想に対する筆者自身のスタンス——賛成的であるにせよ，批判的であるにせよ——もが，打ち出されており，刺激に富む巻が多い。『ハーバーマス』もその例にもれない。とくに，ハーバーマスの思想をドイツ思想史の文脈で捉えるだけでなく，もっと突っ込んで，フランスのいわゆるポストモダンからの，あるいはそれへの影響関係において，論及している箇所は，ドイツ思想界にも，フランス経由のポストモダン思想が移入され始めている昨今，ハーバーマスはもとより，ポストモダンそのものの再考をも促しうる点で，興味深い。以下では，ハーバーマスへの優れた手引きであるこの著作にさらに解説を加えて，その簡明な論旨と的確な解説に屋上屋を架すことを避けるために，著作の概要はごく簡単に要旨のみを伝えるにとどめさせていただく。その代わりここでは，上に指摘したドイツ思想界の昨今の事情をもかんがみて，ただもっぱら，ドイツ・フランス関係の視点から，特にハーバーマスとデリダとの対決という観点から，『ハーバーマス』に対する私なりの疑問点を提示してみたい。したがって，書評という形をとりながらも，むしろ『ハーバーマス』への一種の応答としての私なりの見解の提示が，拙稿の目論見である。

『ハーバーマス』で著者中岡氏は，処女作『公共性の構造転換』から，主著『コミュニケーション的行為の理論』を経て，最近の著作『事実性と妥当』にいたるハーバーマス思想の歩みをたどる。内容的には，アドルノに近いスタンスをとっていた時代から，ルーマンとの論争などをへて，フランクフルト学派第一世代から距離をとり，コミュニケーション行為という独自の立場を確立しつつ，フランスのポストモダンとの対決を企て，現在にいたる経緯が描かれる。「ハーバーマスは，競争社会が余儀なくさせる人間のエゴイズムに対して，素朴ともいえるほどの義憤を感じる。一人の幸福が他の人の不幸によってのみ得られる仕組みをかれは拒絶し，そのような〈交換〉の暴力なしに人々が，互いに，結びつき，交流することのできる社会状態を望む。現実社会の諸矛盾の分析と批判，そしてその理論的探究を支える基本的倫理観は，フランクフルト学派に共通の態度である。」(12頁)。しかしながら，フランクフルト学派の「第一世代に属する人々がときおり抱いていたらしい〈自然との和解〉といったユートピア的願望を，ハーバーマスは(…)共有」(同頁) せずに，「コミュニケーション的行為」という「理論的新境地」を通じて第一世代から距離をとろうと試みる。コミュニケーション的行為とは「力づくではなく，〈妥当要求〉を掲げたうえで，その承認を相手に求めるという，納得づく(了解)のやり方を取る」(153

頁)「対話的理性」という合理性の形態を意味する。「現実の社会ではさまざまな要因によって歪められているこの合理性を十全な形で実現していくことを，ハーバーマスの社会理論はめざしているのだ」(19頁)。こうしたコミュニケーション理論に対して，「理想的なコミュニケーションを志向するかれの理論が，〈事実〉に対して有効性を持たない，〈通用(妥当)〉しない」(247頁)という批判が多くなされているが，それに対して，『事実性と妥当』で，あくまでもコミュニケーション理論から，理想の現実への適用を説明しようとする近年のハーバーマスの反応が紹介されて，『ハーバーマス』は締めくくられる。

さて，『ハーバーマス』についての以上のごく簡単な概要の紹介に引き続いて，以下では，デリダ／ハーバーマス対決に対する中岡氏のスタンスを検討したい。中岡氏自身のハーバーマスに対するスタンスは，「まえがき」にも明らかなように，ハーバーマス思想は「ある種の小さな，しかし縮めることのむずかしい距離を感じさせる存在」という言葉に明らかであるが，しかしハーバーマスとポストモダン，特にデリダとの関係に関するかぎり，むしろハーバーマスに肩入れする立場である。あるいはもっと正確にいえば，中岡氏は，「デリダの〈差異〉の思想は，記号のアクロバティックな使用でひとをうならせるが，しかし，社会的実践が要求する単純率直さからは離れがちだ」(「まえがき」)，とむしろ批判的なスタンスから語りつつも，「デリダの脱構築とハーバーマスのコミュニケーション論は，社会的存在としての人間を異なった角度から明らかにしており，わたしたちはこの両者を等しく真剣に受け止める必要があるだろう」(200頁)として，中立的ないし留保の態度を取っている。ところで，デリダを批判するためにも，あるいはまた，デリダとハーバーマスを真剣に受けとめるためにも，デリダを正確に理解することが要求されるはずである。ところが，私の見るところでは，中岡氏のデリダ理解の仕方には，疑義を感じざるをえない。少しばかり，立ち入った議論になるが，以下，デリダ哲学の根幹に係わることなので，氏のデリダ理解を検討してみよう。氏はデリダについてこう言っている。「完全に同一の〈意味〉がつねに現前しているという〈現前性の思考〉に反対して，デリダはその背後にある〈反復〉の構造を突きつける。すなわち，あらゆるものが時間と経験の流れにひきさらわれつつ，まさにそのもの〈として〉現前せしめられている。素朴にそれ自身と同一のものは存在せず，すべての自己同一性は反復の構造のうちでそのように構成されるというのだ。その意味で，時間的な差異と他性とが，同一性よりも先にあるのに，〈現前性の思考〉はこの事情を覆い隠す」(196頁)，と。

この条りを見るかぎり，氏は，(自己)同一性，差異，他性，あるいは時間，そして現前性といったデリダのタームを狭めて理解しているように思われる。ここでは，デリダがハイデガーを批判的に継承しつつ，問いの渦中に投ずる，《時間》というデリダ思想の最も重要なコンセプトのひとつについて考えてみよう。上の引用文で中岡氏は，「時間(…)の流れ」を，何か自明なもののように語っているように思われる。私の見るところでは，他の箇所でも，それに関してなんら明確な規定は与えられていない。もしも，それが，自明なものであるとすれば，時間の流れとは，過去から現在をへて未来へと続く連続体ということになるだろう。こう考えてよいとすれば，それはデリダの時間解釈の理解には不十

分である。デリダによれば，伝統的哲学は，過去を過ぎ去った現在，未来をいまだ来たらざる現在と捉えているが，これは，過去と未来を現在の変容体とみなし，それらを現在の地平へと還元することを意味する。このような還元を通じて，伝統的哲学は，過去や未来といった現在とは異なったものを，つまり現在の他者を問題にしていると主張してるときでも，その実，過去や未来を現在の変容体として扱っているにすぎない。こうして，伝統的哲学は，過去や未来といった現在にとっての他者を現在という地平へと押し込めてしまい，その結果，そうした他者を現在の地平によって覆い隠してしまうことになる。現在(現前性)の覇権の力は，単に個別の現在だけでなく，現在の変容体と解された過去や未来にまで及ぶのである。ここで仮に，過去・未来と区別された現在を狭義の現在，過去・未来をも取り込んだ現在を広義の現在と名づけておこう。デリダが伝統的哲学を「現前性の思考」として問いの渦中に投ずるとき，彼が，批判の最終的な射程として狙っているのは，この広義の現在にもとづく哲学システムなのである。

そして，こうした広義の時間論の批判との関連で，デリダの言う「他者」や「差異」そして彼の批判する「同一性」も理解されねばならない。手短に言えば，デリダの言う「他者」を，狭義の時間論のモデルに従って解釈するならば，つまり，個別的・アトム的現在と区別されてはいるが，現在の変容体にすぎない過去ないし未来という意味での他者として理解するならば，そうした理解は，それが批判したはずの現在の地平へと，そうとは知らぬ間に，引きずり戻される結果に終わる。したがって，《真の》他者を考え，この他者を覆い隠す《同一性》を批判しようとする思考は，やはり——上で指摘したように——この，過去と未来をも取り込んだ広義の現在の力の全体を，問い直すのでなければならないのである。

これに対して中岡氏の議論では，このような広義の時間論と狭義のそれとの相違は明らかでない。したがって，氏が「時間的な差異と他性とが，同一性よりも先にある」と語るとき，この「時間的な差異や他性」が，どちらの意味で言われているのかが明らかでない。しかし，「素朴にそれ自身と同一のものは存在」しないといった言い回しからすれば，氏は，やはり狭義の時間論にとどまり，狭義の(個別的)現在をモデルにして，「素朴にそれ自身と同一のもの」(例えば，個別的アトム的現在といった)を理解しているのではないだろうか。さらに，続く「同一性か差異性か」という条りで中岡氏は，ハーバーマスを「同一性」の擁護者，デリダを「《差異の思想》」の提唱者として対比しているが，二人の哲学者における同一性とか差異性の意味づけを明確にしないかぎり，こうした対比そのものが，基盤を失いかねないだろう。以上，デリダの《時間》論的側面から中岡氏のデリダ理解を検討してみた。

こうした議論は瑣末なことではない。デリダ思想とハーバーマス思想との，とかくすれ違いに終わりがちな論争の争点を明らかにするためにも，また，戦後ドイツのナチズム批判や民主化政策，さらにはその基礎となっている近代合理性の批判的継承，さらには，ノーベルト・ボルツなどに見られる，ドイツ思想界の最近のポストモダン受容のあり方などを考えるためにも，このような基礎的概念装置の分析作業が不可欠であると思われる。

注 1) 詳しくは，拙稿『デリダにおけるニーチェの影』(『比較文学年誌』32 号 早稲田大学比較文学研究室発行) を参照いただければ幸いである。

中岡成文著『現代思想の冒険家たち 27「ハーバーマス」』講談社 1996 年